

原風景はどのように語られるのか
～環境心理学からの一考察～

北九州市立大学大学院 社会システム研究科地域コミュニティ専攻
2022M30005 堺智月

論文要旨

《問題と目的》

南(2006)は、「人間と環境との相互浸透(トランザクション〈transaction〉)という考えは、環境心理学の始まりにおいて理論的な支柱であった(Ittelson et al.,1974)」とし、「相互浸透論の要点は、人間と環境との相互関係を動的な相互生成過程としてみていく視点」にあると述べている。そして、本研究で扱う原風景も、人と環境が切り分けられずに相互浸透し、循環しながら影響を与え合う動的な過程の中で生まれてくると考えられる。

原風景とは、「個人の美意識や価値観などに大きな影響を与える幼少年期(7-8歳ごろまで)ならびに思春期(20歳前後)の生活環境の風景や体験の全体像(造園用語辞典第1版,1985)」と言われるものである。呉・園田(2006)によると、原風景想起の背景には、それまで自分を取り巻いていた環境の「喪失」という一見ネガティブな体験があるとされる一方で、井上(1995)及び星野・長谷川(1985)によると、様々な感情が合わさりつつも、原風景の想起には主にポジティブな感情を伴うと言われている。このことから本研究では、原風景をただ想起するだけでなく、“今”原風景を語り意味づけていくことで、現在やこれからの生活を支えてくれるものとして原風景を捉え直していくことが重要であると考えられる。

そこで、原風景を「語る」という手法を用い、過去をベースとした原風景への意味づけに着目した呉(2000)の研究を土台としつつ、本研究においては、個々人がどのような原風景を形成しているかをまず捉えた上で、その原風景を今どのように語り意味づけるのか、そして、それら原風景が現在のその人の生活にどのように繋がってきそうかについて、過去から現在の時系列で検討することを目的とする。

《方法》

粕屋町で活動している「おとなの楽校」の方々、計4名に個別の半構造化インタビューを行った。そのうち3名を分析対象として、得られたインタビューデータをKJ法(川喜田,1967)を援用して分析し、どのような原風景が形成されていたかの全体像を掴んだ。その上で、原風景がどのように語られたのか、現在の個々人の生活とどのように繋がってきそうかについて考察した。

《結果と考察》

ここには、研究協力者のうち、Bさんの原風景の語りを要約して示す。

図1に見られるように、Bさんは計8つの原風景を形成していると考えられた。また、それら原風景は、【①屋外の原風景(i・iv・v・vi・vii)】、家の原風景(viii)、【②屋内の原風景(ii)】に分けられた(iiiの原風景は場所を聞いていなかったため不明とした)。論文では、田んぼに咲いていたレンゲを自由な発想で生かしてオリジナルの遊びを作り出したり、いろいろな場所に生えていたオオバコを見つけて草相撲の遊び場を作り出したり、ご飯を作ってピクニックに行っていたというiの原風景を【①屋外の原風景】の代表例として取り上げ、また、家にあった箱や本を活用してより楽しめるお人形ごっこの遊び

場を作り出したり、お人形のお洋服などを自分で考えて作っていたという ii の原風景を【②屋内の原風景】の代表例として取り上げた。Bさんはそれら原風景に対して、「私きっとね、作るっていうことが好きなんだと思う」という意味づけをし、今に繋げつつ楽しそうに語った。そして、好奇心や好きという気持ちで作ることをしていた原体験が核となり形成された原風景は、現在の生活においても、Bさんが野菜作りや手芸など好奇心を持って作っていたり、おとなの楽校の活動にも好奇心を持って参加し、場作りにも携わっていることと繋がっていると考えられ、子ども時代から現在にかけて、“好奇心や好きという気持ちで何かを作る”ことがBさんの活力になっていることが見えてきた。

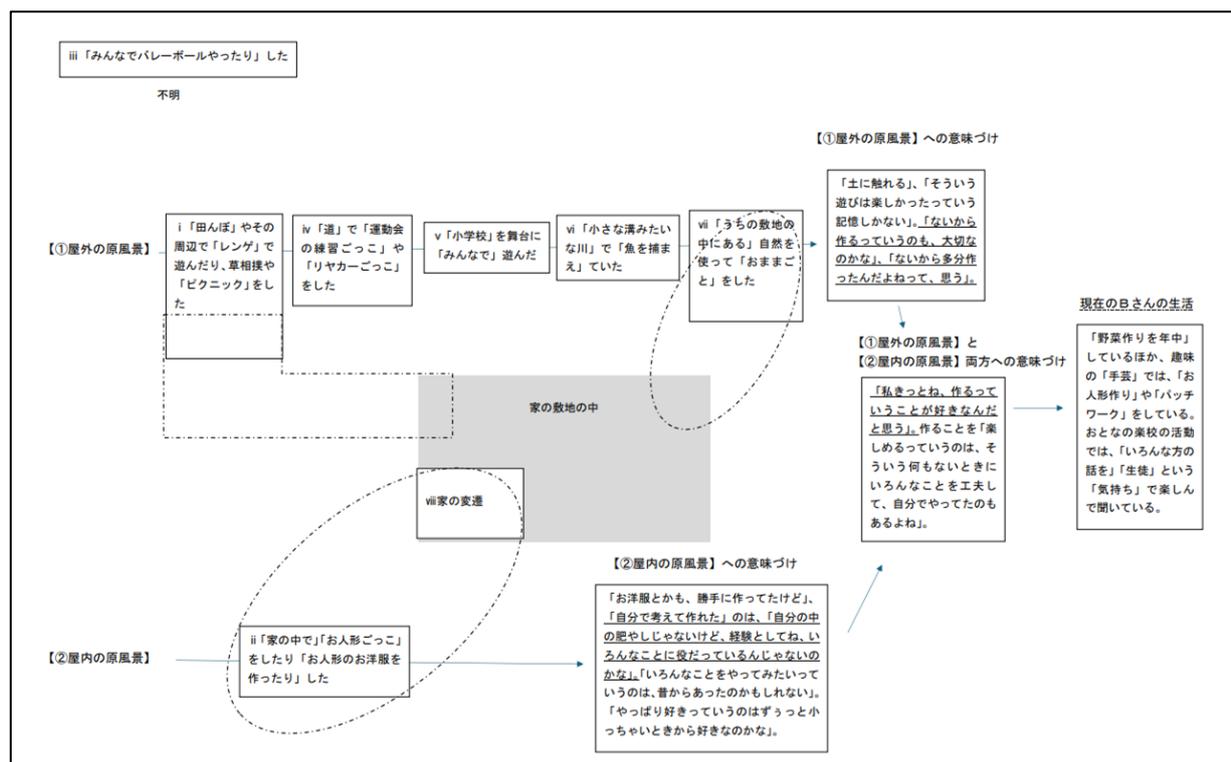


図1. Bさんの原風景及び原風景と現在との繋がり

《総合考察》

このように、3名の原風景の語りを考察していくと、原風景（過去）を濃く語る人、原風景（過去）を現在に繋げながら語る人、原風景（過去）よりも（原風景を土台とした）現在を濃く語る人というように、それぞれ語りの力点は異なっていたものの、どのような原風景が形成されていたのかについて、調査協力が語った原風景を包括的に捉えたときには、大別して、その人の拠点となる家を舞台に形成された原風景と、そこから広がりを持った家周辺を舞台とした原風景の2種類に分けられるという共通点も見えてきた。また、その人の原風景と現在の生活がどのように繋がっているかを表わす「一貫したテーマ（呉, 2000）」があることが、本研究においても確認された。

原風景を掴むためには、その人の子ども時代の原体験と、原体験の舞台となった場所が語られることがまず重要であり、それに加えて、そこがどのような場所だったかや、どのような人がいたか、どのような感情が巻き起こっていたかなど、原体験がどういった環境に取り巻かれながら行われたかということがまるごと語られていく必要がある。加えて本研究では、その人の原風景が引き出される上で要となるよ

うな人や場所の存在があることも確認され、このような原風景の要が語られることも、原風景を掴むための大きな手がかりとなる。

また、語り手と聞き手によって、原風景の語りは共同生成されていくと考えられた。語り手が自らの原風景を実感し、現在の生活を営む活力を取り戻すことと結びつけていくためには、語り手の原風景の語りを引き出し、一緒に原風景の形を掴んでいく聞き手の存在が重要である。

そして、原風景を語ることで、環境と切り分けられてしまったように感じていた自分自身を、再び環境と切り分けることができないものとして感じていくところに、「明日への活力（星野・長谷川, 1985）」も得られていくのではないかと考える。さらには、呉（2006）により、原風景の語り合いとまちづくりの関連が指摘されているように、原風景の語りから、町や町での暮らしに今一度愛着を持っていくことも、生活を楽しく送ることに繋がっていくのではないだろうか。町の人々の交流の場であるおとなの楽校のような場はもちろん、町の中にある喫茶店や道端などで原風景のようなものが語り合われ、地域の人々の生きる活力に繋がっていくことを期待する。

《引用文献》

- 南博文(著) (2006). 第1章 環境との深いトランザクションの学へ -環境を系に含めることによって心理学はどう変わるか? 南博文(編) 心理学の新しいかたち 第10巻 環境心理学の新しいかたち 誠信書房 3-25
- 東京農業大学農学部造園学科造園用語辞典編集委員会(編) (1985). 進士五十八(原風景項目著) 造園用語辞典 第1版 彰国社 173
- 呉宣兒・園田美保(著) (2006). 第8章 場所への愛着と原風景 南博文(編) 心理学の新しいかたち 第10巻 環境心理学の新しいかたち 誠信書房 215-239
- 井上佳朗 (1995). 原風景の心理学的研究 鹿児島大学法文学部紀要 27-68
- 星野命・長谷川浩一 (1985). 青年の「心の風土」としての原風景 九学会連合日本風土調査委員会編 日本の風土 第7章 弘文堂 119-153
- 呉宣兒 (2000). 語りから見る原風景: 語りの種類と語りタイプ 発達心理学研究 第11巻 第2号 132-145
- 川喜田二郎 (1967). 発想法 中公新書 136 中央公論新社 65-114
- 呉宣兒 (2006). 地域デザインにおける「原風景」の共同性 -理論的・実践的モデルの考察- 人間・環境学会誌 第9号 2巻 1-10